

北京オリンピック大会と国民イメージ(1)^{1) 2) 3)}

佐久間 勲
八ッ橋武明
李 岩 梅

The Beijing Olympics and images of national people

Isao Sakuma
Takeaki Yatsushashi
Yanmei Li

We examined the impact of Beijing Olympics on the images of national people. We administered the questionnaires to Japanese undergraduate students before and after the Beijing Olympics. The questionnaires included the scale of images of national people. We found that images of national people changed positively in a certain dimension, but a few images changed negatively. We discussed these changes of images and the directionality of the research.

問題

本研究は、北京オリンピック大会の前後で国民イメージ変化するかどうかを実証的に検討する。この検討を通して、北京オリンピック大会が国民イメージに及ぼす影響について考察する。本研究と同様の研究を中国人大学生、韓国人大学生にも実施しているが、本論文の中では日本人大学生を対象とした調査結果について報告する。

国際的スポーツイベントと国民イメージ

これまでにオリンピック大会やW杯サッカー大会などの国際的スポーツイベントが、自国民を含む国民イメージの変化に及ぼす影響が検討されてきた。

その先駆的な研究が高木・坂元(1991)である。彼らは、ソウル・オリンピック大会の開催の前後に日本人を含む複数の国民についてのイメージを測定し、それがどのように変化したか、さらにその変化を規定する要因にはどのようなものがあるのかを検討した。この研究に引き続き、バルセロナ・オリンピック大会(Sakamoto, Murata, & Takaki, 1999)、アトランタ・オリンピック大会(向田・坂元・村田・高木, 2001)、シドニー・オリンピック大会(向田・坂元・高木・村田, 2007)、アテネ・オリンピック大会(樋口・村田・稲葉・向田・佐久間・高林, 2005; 村田・稲葉・向田・佐久間・樋口・高林, 2005; 高林・村田・稲葉・向田・佐久間・樋口, 2005)の4つのオリンピック大会でも同様の研究が実施された。

さらにオリンピック大会にならぶ国際的スポーツイベントとしてW杯サッカー大会がある。日本が初出場したW杯サッカー・フランス大会(藤島・村田・伊藤・佐久間, 1998)、韓国と日本で共催されたW杯サッカー・韓日大会(上瀬・萩原, 2003; 村田, 2003)、そしてW杯サッカー・ドイツ大会(佐久間・藤島・高林, 2007; 佐久間・村田, 2007)でも、オリンピック大会と同様の研究が実施され、W杯サッカー大会が国民イメージに及ぼす影響が検討されてきた。

これらの先行研究では、オリンピック大会やW杯サッカー大会などの国際的スポーツイベントが国民イメージに影響を及ぼす可能性が示唆されている。すなわち大会の前後で国民イメージの変化が見出されている。そして、その変化の大半は肯定的な方向へのものであった。

たとえば、バルセロナ・オリンピック大会、アトランタ・オリンピック大会では、大会開催国であるスペイン人、アメリカ人のイメージが肯定的な方向に変化していた(向田他, 2001; Sakamoto et al., 1999)。日本人のイメージについては、オリンピック大会に限定すると、常に肯定的な方向に変化することが確認されている(樋口他, 2005; 向田他, 2001; Sakamoto et al., 1999; 高林他, 2005; 高木・坂元, 1991)。

しかしながら、国際的スポーツイベントが否定的な影響をもたらす可能性も示唆されている。たとえば、ソウル・オリンピック大会でのカナダ人、韓国人(高木・坂元, 1991)、アテネ・オリンピック大会でのハンガリー人、中国人、ギリシャ人(樋口他, 2005; 高林他, 2005)、W杯サッカー・フランス大会でのフランス人(藤島他, 1998)、W杯サッカー・ドイツ大会でのオーストラリア人、イタリア人(佐久間他, 2007)については、それぞれの国民のイメージが大会前と比較をして大会後に悪化していた。これらの変化については、大会時および大会前の出来事の影響(例：選手の不祥事、開催国の準備不足)、日本人に脅威をもたらすような好成績を挙げた国民(例：ソウル・オリンピック大会での韓国人)や日本代表や日本人選手が対戦して負けた国民(例：W杯サッカー・ドイツ大会でのオーストラリア人)に対する自己防衛的な反応であると考察されている。

このように先行研究では、オリンピック大会やW杯サッカー大会の前後で国民イメージが変化することが繰り返し確認されてきた。これらの一連の研究に引き続き、本研究でも北京オリンピック大会の前後で国民イメージを測定し、国民イメージが変化するかどうか実証的に検討することを通して、北京オリンピック大会が国民イメージに及ぼす影響について考察する。

国民イメージの構造

初期の研究では、国民イメージを「好意」の1次元で検討してきた(藤島他, 1998; 向田他, 2001; Sakamoto et al., 1999)。つまり対象の国民のイメージがどの程度好意的なものであるのかが問題にされてきた。

それに対して、集団に対するイメージと同様の意味として用いられるステレオタイプを扱った研究をみると、ステレオタイプの内容は「あたたかさ(好意)」と「知的能力」の2次元からとらえることができること、そして多くのステレオタイプは、これら2つの次元が相補的に組み合わせられた内容になっていることが指摘されている(Fiske, Cuddy, Glick & Xu, 2002; Fiske, Xu & Cuddy, 1999)。したがって、多くのステレオタイプは、単純にどの程度好意的かどうかということではなく、「あたたかいけど知的でない」「知的だけれども冷たい」という両面価値的な内容を伴ったものになっているという。

このFiskeらの議論にしたがい、高林他(2005)、樋口(2005)、佐久間他(2007)、佐久間・村田(2007)は、国民イメージを「あたたかさ」と「知的能力」の2次元で測定し、それぞれの次元ごと

に変化が見られるかどうかを検討した。その結果、一方の次元だけで変化が見られること、場合によっては、一方の次元の変化とは逆の方向に他方の次元が変化することを見出した。こうした結果に基づき、本研究も国民イメージの測定に、「あたたかさ(好意)」と「知的能力」の2次元を用いることにする。

さらに本研究では、これらの2次元に、「身体能力」と「ずるがしこさ」を加えた合計4つの次元で国民イメージを測定する。

「身体能力」は近年スポーツの場面で人を表現する単語として使用されるようになってきたものである(森田, 2007)。特に、アフリカ系アメリカ人のステレオタイプとして問題視されている(川島, 2009; 山本, 2002)。さらに、アフリカおよび南米の国民について「身体能力が高い」と判断することが「知的能力が低い」ことを含意する可能性も指摘されている(村田, 2006)。このように「身体能力」の次元は、オリンピック大会というスポーツの場面での国民イメージの測定に適している、さらに否定的なイメージを暗黙のうちに意味しているという点で重要であると考えて加えることにした。⁴⁾

「ずるがしこさ」は、人の良さを示す「あたたかさ」、頭の良さを示す「知的能力」とは独立した次元として国民イメージをとらえる有効なものであると考えて、本研究では探索的に加えることにした。⁵⁾

方法

調査対象者と調査の手続き

北京オリンピック大会開催前(事前調査)と開催後(事後調査)に調査を実施した。それぞれの調査対象者と調査手続きは次の通りであった。

事前調査 関東地方およびその近郊の10校の大学で心理学関連の授業を受講している大学生、短大生、専門学校生、合計1444名に対して、授業時間の一部を使用して質問紙調査を実施した。調査実施時期は2008年5月上旬から中旬であった。

事後調査 事後調査への協力を申し出た590名に対して、北京オリンピック大会終了後の2008年8月末に電子メールでweb調査の案内を送付した。このうち42名にあてた電子メールは不達のために戻ってきた。最終的に207名が調査に回答した。web調査の実施時期は2008年8月末から9月中旬であった。事前調査と事後調査の両方への回答をした学生にはwebで利用できるクーポン券(500円)を謝礼とした。

国民イメージの測定法

対象となった国民 質問紙は3種類あった。それぞれの種類の中で、調査対象者は6つの国民のイメージについて回答した。6つの国民のうち、日本人、中国人、韓国人、アメリカ人は3種類すべてに含まれていた。残りの2つの国民は、ロシア人とブラジル人、オーストラリア人とキューバ人、イギリス人とケニア人のいずれかの組み合わせのものが含まれていた。国民イメージの回答順序は、それぞれの種類ごとに2つのパターンを用意した。

国民イメージの測定項目⁶⁾ 10個の形容詞対を用いて国民イメージを測定した(7件法)。10個の形容詞対のうち、「あたたかさ」に関する形容詞対は「親しみやすい-親しみにくい」「暖かい-冷たい」「好き-嫌い」、「知的能力」に関する形容詞対は「頭がよい-頭が悪い」「有能な-有能でな

い」「知的な－知的でない」、「身体能力」に関する形容詞対は「運動神経がある－運動神経がない」「身体能力が高い－身体能力が低い」、「ずるがしこさ」に関する形容詞対は「ひきょうな－ひきょうでない」「ずるがしこい－バカ正直な」であった。

結果

分析対象者

事前調査と事後調査の両方に回答した対象者のうち、留学生を除いた205名(男性87名、女性118名)を分析対象とした。

国民イメージの尺度得点の算出

国民イメージを測定するために用意した4つの次元を構成する項目について、事後調査と事前調査に分けて国民ごとに内の一貫性の程度を検討した。3項目からなる尺度に関しては α 係数を算出した。2項目からなる尺度に関してはピアソンの積率相関係数を算出した。

その結果、多くの尺度で、.60以上の α 係数、.40以上の相関係数が見られた。そこで本研究では、当初から想定していた通りの項目で尺度を構成することにした。具体的には尺度を構成する項目の平均を、それぞれの尺度得点とした。

国民イメージの変化

各国民に対する事前調査と事後調査の国民イメージの尺度得点の平均値は表の通りであった。事前調査と事後調査の尺度得点の平均値に有意差があるかを検討するために、それぞれの尺度得点について対応のある t 検定を実施した。以下、それぞれの尺度得点ごとに結果を述べる。

あたたかさ ケニア人($t(39)=2.05, p<.05$)、ロシア人($t(53)=2.07, p<.05$)において事前調査と事後調査の間に有意差が見られた。事前調査と比較して事後調査で、ケニア人に対するイメージは「あたたかい」、ロシア人に対するイメージは「冷たい」という方向に変化していた。

知的能力 アメリカ人($t(201)=3.80, p<.001$)、日本人($t(201)=2.18, p<.05$)、ケニア人($t(40)=3.17, p<.01$)、オーストラリア人($t(108)=2.18, p<.05$)において事前調査と事後調査の間に有意差が見られた。ケニア人以外に対するイメージは、事前調査と比較して事後調査で、「知的能力が高い」という方向に変化していた。

身体能力 アメリカ人($t(203)=4.53, p<.001$)、中国人($t(203)=4.54, p<.001$)、日本人($t(203)=2.25, p<.05$)、キューバ人($t(107)=3.16, p<.001$)、ロシア人($t(53)=1.81, p<.10$)において事前調査と事後調査の間に有意差が見られた。事前調査と比較して事後調査で、いずれの国民に対するイメージも、「身体能力が高い」という方向に変化していた。

ずるがしこさ 韓国人($t(202)=2.83, p<.01$)、日本人($t(203)=2.05, p<.05$)において事前調査と事後調査の間に有意差が見られた。事前調査と比較して事後調査で、韓国人に対するイメージは「ずるがしこい」、日本人に対するイメージは「ずるがしこくない」という方向に変化していた。

表 尺度得点の平均値（標準偏差）

国民	n	あたたかさ			知的能力			身体能力			ずるがしこさ		
		事前	事後	t検定	事前	事後	t検定	事前	事後	t検定	事前	事後	t検定
アメリカ人	202-204	4.86 (0.96)	4.78 (0.91)		4.28 (0.86)	4.54 (0.83)	***	5.13 (1.02)	5.41 (0.91)	***	4.24 (0.95)	4.23 (0.89)	
韓国人	203	4.01 (1.15)	3.97 (1.11)		4.17 (0.95)	4.11 (1.03)		3.99 (0.90)	4.02 (0.90)		4.35 (0.98)	4.56 (1.06)	**
中国人	204	3.24 (1.04)	3.14 (1.06)		3.96 (1.07)	4.04 (1.11)		4.28 (1.19)	4.63 (1.17)	***	5.09 (1.07)	5.16 (1.02)	
日本人	202-204	5.00 (1.00)	4.97 (1.03)		4.57 (0.86)	4.71 (0.87)	*	3.58 (0.93)	3.72 (0.98)	*	3.98 (1.03)	3.84 (1.03)	*
ブラジル人	53-54	4.94 (0.84)	5.07 (0.82)		3.64 (0.56)	3.69 (0.71)		5.95 (0.95)	5.83 (0.89)		3.43 (0.69)	3.49 (0.74)	
キューバ人	108-109	4.22 (0.66)	4.26 (0.69)		3.75 (0.67)	3.79 (0.67)		5.31 (1.12)	5.60 (1.02)	**	3.67 (0.78)	3.58 (0.79)	
ケニア人	40-41	4.43 (0.78)	4.68 (0.77)	*	3.92 (0.65)	3.58 (0.65)	**	5.94 (1.16)	6.18 (1.00)		3.28 (0.84)	3.00 (1.00)	
ロシア人	54	3.80 (0.83)	3.60 (0.81)	*	4.46 (0.71)	4.55 (0.83)		4.84 (0.96)	5.06 (0.82)	+	4.49 (0.70)	4.57 (0.73)	
オーストラリア人	108-109	4.78 (0.82)	4.84 (0.81)		4.13 (0.68)	4.28 (0.72)	*	4.64 (0.91)	4.77 (0.81)		3.67 (0.65)	3.63 (0.74)	
イギリス人	41	4.51 (0.89)	4.35 (1.01)		5.09 (0.88)	5.05 (0.77)		4.30 (0.87)	4.40 (0.90)		4.11 (0.87)	4.21 (0.87)	

*** p < .001, ** p < .01, * p < .05, + p < .10

考察

本研究は、北京オリンピック大会が国民イメージに及ぼす影響について考察することを目的として行われた。調査によって得られた結果に基づいて、その影響について考察する。

国民イメージの変化について

先行研究と同様に、日本人を含む多くの国民イメージが肯定的な方向に変化していた。この結果は、オリンピック大会がわれわれに肯定的な影響をもたらしてくれることを示唆するものである。特に肯定的な方向に変化が見られた次元は「知的能力」と「身体能力」であった。この2つの次元で変化が生じた原因として、北京オリンピック大会での競技成績が影響している可能性が考えられる。つまり、北京オリンピック大会でメダルの獲得数も多かった国民や、目立って活躍した選手がいた国民の「知的能力」と「身体能力」が肯定的な方向に変化した可能性があるだろう。⁷⁾

他方で、国民イメージが否定的な方向に変化している結果も見出された。本研究でも、韓国人の「ずるがしこさ」については、より否定的な方向に変化していた。先行研究でも、韓国人のイメー

ジが否定的な方向に変化することが見出されてきた(高木・坂元, 1991; 佐久間他, 2007)。こうした韓国人のイメージが否定的な方向に変化する原因の1つは、競技成績の結果があるだろう。北京オリンピック大会でもメダル数で韓国が日本を上回っていることや、注目競技である野球で日本が韓国に負けたことが、韓国人のイメージを否定的な方向に変化させた原因の1つであると考えられる。

国民イメージの変化のうち、興味深い結果は、ケニア人のイメージ変化であった。ケニア人については、「あたたかさ」に関しては、よりあたたかい方向に、一方、「知的能力」に関しては、より知的能力が低い方向に変化していた。この結果は、「あたたかさ」と「知的能力」の2次元が互いに補償している(Fiske et al., 2002; Fiske et al., 1999)ことを示唆するものであった。さらに、国民イメージを「好意」という1次元ではなく、「あたたかさ(好意)」と「知的能力」の2次元でとらえることが有効であったことを示唆している。

最後に、自国民の日本人のイメージに関しては、先行研究と同様に肯定的な方向に変化していた。ただし「あたたかさ」に関する変化は見られなかった。オリンピックに関する先行研究は、日本人の「あたたかさ(好意)」が肯定的な方向に変化することが繰り返し見出されてきた。「あたたかさ」の次元と関連がある心理的変数として「愛国心」がある。愛国心は、内集団に対する素朴な愛着のことである(Kosterman & Feshbach, 1989)。北京オリンピック大会を通して、愛国心が特に高まらなかったために、「あたたかさ」のイメージも変化が見られなかった可能性があるだろう。ただしなぜ愛国心が高まらなかったのか、その原因は現段階では明確ではない。今後さらなる分析を進めて、この原因を明らかにする必要があるだろう。

今後の検討課題

最後に今後の検討課題について述べる。本研究では、いくつかの国民のイメージ得点に変化していることが見出された。今後は、こうした変化を規定する要因を明らかにするために、さらなる分析を実施したい。先行研究では、メディア報道への接触(向田他, 2001)、愛国心、ナショナリズムといった個人差の影響(村田他, 2005; 佐久間・村田, 2007)などが国民イメージの変化を規定する要因として指摘されている。本研究のデータについても、メディア報道への接触、愛国心、ナショナリズムについての質問項目が含まれている。今後、これらの要因が国民イメージの変化を規定するかどうかを検討したい。

さらに本研究と同様の調査を、中国人大学生、韓国人大学生を対象に実施した。中国人大学生、韓国人大学生においても、国際的スポーツイベントが国民イメージに影響を及ぼす可能性があるのか検討を加え、改めて報告したい。

引用文献

- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.
- Fiske, S. T., Xu, J., & Cuddy, A. C. (1999). (Dis)respecting versus (Dis)liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, **55**, 473-389.
- 藤島喜嗣・村田光二・伊藤忠弘・佐久間勲 (1998). '98W杯サッカーフランス大会による外国イメー

- ジの変化(1)－好意度と類似性－日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 198-199.
- 樋口収・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・高林久美子(2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(3)－市民調査の結果－日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 610-611.
- 上瀬由美子・萩原滋(2003). ワールドカップによる韓国・韓国人イメージの変化 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, 57, 111-124.
- 川島浩平(2009). 「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差を探る－概念規定と方法論を中心に－武蔵大学人文学会論集, 40, 1-29.
- Kosterman, R., & Feshbach, S. (1989). Toward a measure of patriotic and nationalistic attitudes. *Political Psychology*, 10, 257-274.
- 森田浩之(2007). スポーツニュースは怖い－刷り込まれる〈日本人〉－NHK出版
- 向田久美子・坂元章・村田光二・高木栄作(2001). アトランタ・オリンピックと外国イメージの変化 社会心理学研究, 16, 159-169.
- 向田久美子・坂元章・高木栄作・村田光二(2007). オリンピック報道は外国人・日本人イメージにどのような影響を与えてきたか－シドニー・オリンピックを中心に 人間文化創成科学論叢, 10, 297-307.
- 村田光二(2003). 韓日W杯サッカー大会における日本人大学生の韓国人, 日本人イメージの変化と自己奉仕的帰属 日本グループ・ダイナミックス学会第50回大会発表論文集, 122-123.
- 村田光二(2006). 「高い身体能力」は偏見の表明か?－外国人イメージにおける知的能力次元と身体能力次元の関係の検討－日本心理学会第70回大会発表論文集, 75.
- 村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収・高林久美子(2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(1)－愛国心, ナショナリズム尺度の検討－日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 64-65.
- Sakamoto, A., Murata, K., & Takaki, E. (1999). The Barcelona Olympics and the perception of foreign nations: A panel study of Japanese university students. *Journal of Sport Behavior*, 22, 260-278.
- 佐久間勲・藤島喜嗣・高林久美子(2007). ワールドカップサッカー・ドイツ大会と日本人・外国人イメージの変化－「好意度」と「能力」の変化－日本グループ・ダイナミックス学会第54回大会発表論文集, 212-213.
- 佐久間勲・村田光二(2007). ワールドカップサッカー・ドイツ大会と日本人・外国人イメージの変化－愛国心とナショナリズムの影響－日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 792-793.
- 高林久美子・村田光二・稲葉哲郎・向田久美子・佐久間勲・樋口収(2005). アテネ・オリンピック報道と日本人・外国人イメージ(2)－学生調査の結果－日本社会心理学会第46回大会発表論文集, 608-609.
- 高木栄作・坂元章(1991). ソウルオリンピックによる外国イメージの変化－大学生のパネル調査－社会心理学研究, 6, 98-111.
- 山本敦久(2002). 見えるもの／みえないもの－ワールドカップ, メディア, 「人種」月刊言語, 31(13), 54-57.

注

- 1) 本研究は、平成20年度文教大学情報学部共同研究費の補助を受けて実施された。
- 2) 本研究のデータの収集にあたり、鎌田晶子先生(文教大学)、浅川雅美先生(文教大学)、及川晴先生(帝京大学)、横井俊先生(文教大学非常勤講師)にお世話になりました。記して感謝いたします。
- 3) 本研究の一部は、日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミクス学会第56回大会合同大会(大阪大学)で発表された。
- 4) アテネ・オリンピック大会での研究でも「身体能力」は取り上げられていた(樋口他, 2005; 村田他, 2005; 高林他, 2005)。しかしながら「身体能力」については、1項目で測定が行われていた。そこで本研究は2項目で尺度を構成した。
- 5) 高木・坂元(1991)では、国民イメージを測定する両極形容詞対を因子分析し、その1つの因子が「ずるがしこさ」を伴う「権謀術数性」であると解釈し、その因子を使用した分析も行っている。
- 6) 国民イメージを測定する質問項目以外に、事前調査には、メタ国民イメージ、愛国心、ナショナリズム、メディア報道への接触、国際的スポーツイベントに関する意識、PDゲーム、国家間関係の認知、デモグラフィック変数などの質問項目が含まれていた。事後調査にも、メタ国民イメージ、メディア報道への接触、PDゲーム、国家間関係の認知、デモグラフィック変数などの質問項目が含まれていた。
- 7) 本研究で対象となった国民の北京オリンピック大会での金メダル獲得数の順位は、中国1位、アメリカ2位、ロシア3位、イギリス4位、オーストラリア6位、韓国7位、日本8位、ケニア15位、ブラジル23位、キューバ28位であった。